

< 研究報告 >

看護学生における学業的援助要請の 促進に関する文献レビュー

小澤尚子¹⁾ 及川けい子²⁾

1) 人間総合科学大学保健医療学部看護学科 2) 常磐大学看護学部看護学科

要旨

本研究の目的は、看護学生（以下、学生）が行っている学業的援助要請の実際、および学業的援助要請を解釈するために用いられている援助要請尺度を整理し、学生の援助要請を促進するための知見と教育的支援への示唆を得ることである。国内のデータベースを用い「援助要請」「看護」のキーワードから文献検討し6文献を採択後、学生が行っている学業的援助要請の実際に関する記述から内容の類似性による分類と、用いられている既存の援助要請尺度と関連項目を整理した。学生が行っている学業的援助要請の実際は2コアカテゴリ【学生の援助要請の内容】【学生の援助要請行動の促進・抑制】が生成された。学生の学業的援助要請を促進する要因は、自己効力感、内的動機づけ、学習方略、ソーシャルサポートであった。学生の取り組むべき学習課題の学習プロセスを大切に、学生が根気よく時間をかけて学習課題に向き合うことを基盤とした支援の必要性が示唆された。

キーワード：学業的援助要請、学業的援助要請の促進、看護学生、文献検討

I. 緒言

わが国の看護基礎教育において、看護に必要な知識や技術を習得することに加えて、身につけた知識に基づいて思考する力、及びその思考を基に状況に応じて適切に行動する力をもつ人材、すなわちいかなる状況に対しても、知識、思考、行動というステップを踏み最善な看護を提供できる人材を育成する教育（厚生労働省、2008）の重要性が打ち出された。さらに、看護系人材としての資質・能力を獲得するために、未知の課題に対して、自ら幅広く多様な情報を収集し、創造性の発揮と倫理的・道徳的な判断及び科学的根拠の選択によって課題解決に向けた対応につなげる課題対応能力が、看護職として求められる基本的な資質・能力の一つに挙げられており（文部科学省、2017）、各々の看護基礎教育機関にて、その基本的な資質・能力を修得するための取り組みが実施されている。看護基礎教育の授業形態は、講義、演習、実習であり（杉森

他、2021）、これら授業形態を通して、看護学生（以下、学生）は看護実践能力を修得していく学習過程が求められる。河部（2015）は、自己教育は学生が自己の看護体験を振り返り評価する過程を通して発動の契機となっていると述べている。また、山田他（2018）は、学生が臨地実習において生じるコンフリクトの解決という経験により、自分の成長と変化を自ら感じ取れることが、生涯にわたる「自己研鑽・学習力」の基盤を形成する、と述べている。しかしその一方で、山下他（2018）は、学生の知識量の乏しさから看護過程を展開できず、困難感を抱いていることを明らかにしている。これらから、学生の学習過程で生じる課題は、看護実践能力育成の阻害要因となっている可能性がある。このような学生が自身の力では解くことができない課題に取り組む際、課題解決のために教員や臨床指導者（以下、指導者）、友人などの他者に援助を求めることは、学習を効果的に進めていくためには必

要な行動といえる。

他者に援助を要請する行動は「援助要請」(DePaulo, 1983)と呼ばれ、社会心理学、教育心理学、臨床心理学など、様々な心理学領域で研究されてきた(永井, 2020)。援助要請の捉え方をみると、教育心理学では学業場面でのつまずきについての学業的援助要請が中心的な研究課題であり、社会心理学では、道を尋ねる、落とし物を拾ってもらうなど日常生活での援助要請の課題を扱っており、一方で臨床心理学では悩みや精神疾患などについての相談が課題として扱われている(永井他, 2018)。学業的援助要請について中谷他(2020)は、自身で努力をした後に、自分で問題解決することを意図して、ヒントを求めるものを適応的援助要請、あまり努力をせずに、直接的な答えを求めて他者に問題解決を委ねようとするものを依存的援助要請と、2つの類型に整理している。同じく学業的援助要請について野崎(2003)は、直接的な答えよりもヒントを求める、要請までの時間が長いものを適応的援助要請、ヒントよりも直接的な答えを求めたり、要請までの時間が短いものを依存的援助要請、意図的に要請を避けるものを要請回避と、3つの類型に分類している。この適応的(adaptive)援助要請という用語を1つみても、海外および国内文献において、自律的(autonomous)援助要請、道具的(instrumental)援助要請、適切な(appropriate)援助要請などと多数の用語で用いられているという報告(永井, 2010)があることから、学生の援助要請の論文を検討するには検索する用語が多様であると判断し、今回は国内文献に絞って、看護学領域の援助要請に関する先行研究を検索した。しかしながら、学生の学習過程の困難に関する文献は散見されるものの、学生の学業的援助要請に関する研究知見を集約的に示した文献は見当たらなかった。学生は学習過程において困難や課題が生じた際、教員もしくは指導者に援助要請を行っていることから、援助要請に関する文献より学生の学業的援助要請に関する実際を整理し、教育的支援を見出すことは意義深いと考えた。

そこで本研究では、国内文献より、学生が行っている学業的援助要請の実際、および学業的援助要請を解釈するために用いられている援助要請尺度を整理することにより、学生の学業的援助要請を促進するための知見と教育的支援への示唆を得ることを目的とした。

II. 用語の定義

援助要請

DePaulo(1983)は援助要請を、「個人が問題の解決の必要性があり、もし他者が時間、労力、ある種の資源を費やしてくれるなら時間が解決、軽減するようなもので、その必要のある個人がその他者に対して直接的に援助を要請する行動」と定義している。そこで本研究においては、「学生が、講義、演習、実習の学習過程において独力では解決できない課題を解くために、教員および臨床指導者に助言を求める行為」とする。

III. 研究方法

1. 対象論文の抽出

1) 文献検索

論文は日本で発表されたものとし、検索には医学中央雑誌 Web 版(以下、医中誌)、NII 学術情報ナビゲータ(以下、CiNii)、学術機関リポジトリデータベース(以下、IRDB)、Medical Online のデータベースを用いた。はじめに、医中誌を用いて、検索式“学業的援助要請”AND“看護学生”の2語を検索語とすると検索文献が1件となったため、“援助要請”AND“看護”の2語のキーワードを用いて再検索し、原著論文を対象として広く実施することとした。なお、収録開始年から2023年3月までに各データベースに収集されているすべての文献を対象とした(検索日2023年3月10日)。

2) 文献の採択基準

文献の採択基準は、①論文の種類は原著論文であるもの、②研究対象は看護学生、また対象が看護師の場合は看護基礎教育機関に在籍していた期間に関するもの、③援助要請に関する分析が行われているもの、④和文献および英文献であるものとした。なお、タイトルに「援助要請」という用語を含まないために除外された文献の中に、学生の援助要請に関する文献が含まれていないことを確認した。

3) 文献の除外基準

文献の除外基準は、①書籍、総説・解説・特集、会議録であるもの、②学生の援助要請に関する内容でない判断できるもの、③援助要請に関する分析が行われていないものとした。

2. 論文の選択

データベース検索により抽出された論文123件(医

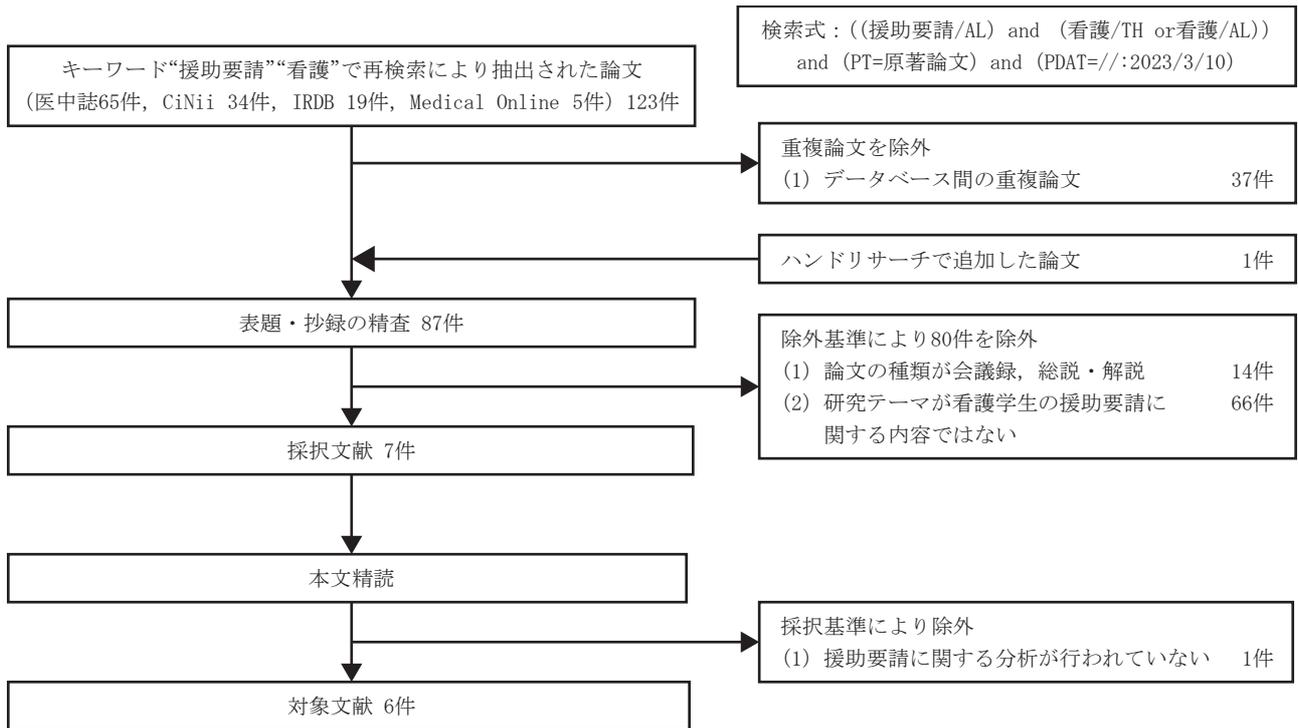


図 1. 文献の選定手順

中誌 65 件, CiNii 34 件, IRDB 19 件, Medical Online 5 件) から, データベース間で重複した論文など 37 件を除外した. ハンドリサーチによって論文を 1 件追加し, 前述の除外基準を用いて, 表題および抄録の精査を行い, 除外基準の原著論文以外の論文 80 件を除外した. 残り 7 件の論文について, 前述の採択基準を用いて本文を精読し, 採択基準を満たさない 1 件を除外して, 最終的に 6 件の論文を採択した. 以上の作業は, 第 1 著者がデータベース検索を行い, 第 2 著者がスクリーニングについて同じ作業を別々に行い, 採択の判断が一致しない論文については協議のうえで論文の採否を決定した. なお, 分析対象文献の選定手順は図 1 に示した.

3. データの分析方法

対象文献を精読し, 抽出された文献のタイトル, 著者 (発表年), 目的, 出典, 研究方法を整理した. 学生が行っている学業的援助要請の実際について, 対象とした文献の結果から記述内容を抜き出してコードとし, コードの類似性からサブカテゴリ, カテゴリを生成した. また, 学生の援助要請における実態調査の結果を明らかにするために, 既存の援助要請尺度と関連

項目を整理した. さらに, 援助要請尺度の開発については, 尺度名, 尺度構成と項目数, 信頼性と妥当性を整理した. 対象とした論文の選定と記述内容の抽出, カテゴリ化およびカテゴリ名については, 結果の信頼性, 妥当性を確保するために, 看護研究者間で互いの意見が一致するまで議論を行った.

文献は, 検討すべき文献の全体像が一覧できるとされる大木 (2013) のマトリックス方式を参考に整理した. 倫理的配慮として, 公表されている文献のみを対象とし, 論文の著作権を尊重, 原論文に忠実であることに努めた. また, コード作成の際には文献の結果を歪曲しないように十分に注意した. さらに援助要請の用語については, 対象とした文献に記載されている通りに抽出し, コードとした.

IV. 結果

1. 学生の援助要請に関する研究の動向

1) 対象とした研究論文 (表 1)

対象とした 6 文献は, 2017 年以降に報告されており, 量的研究 5 件, 質的研究 1 件であった. そのなかで, 学生の実習に関連した研究が 4 件と多かった.

表 1. 看護学生の学業に関する援助要請についての文献リスト

文献 No	表題	著者 (発表年)	目的	出典	研究方法
1	臨地実習における看護学生の援助要請行動に関する研究	近藤浩子, 柿畑雅之, 中村美香, 近藤由香 (2023)	臨地実習における看護学生の援助要請行動の特徴を明らかにする.	北関東医学, 73 (1), 61-68.	量的
2	看護学生の援助要請スキルとソーシャルサポート, 精神的健康の関連	後藤華奈子, 山下久美子, 吉田美栄 (2021)	看護学生の援助要請スキルとソーシャルサポート, 精神的健康との関連を明らかにする.	中国四国地区国立病院附属看護学校紀要, 16, 16-28.	量的
3	看護大学生の臨地実習指導者に対する援助要請の意思決定尺度の開発	五十嵐貴大, 荒木田美香子, 佐藤みつ子 (2021)	看護学生の臨地実習指導者に対する援助要請に関する尺度 (以下, 援助要請尺度) を開発し, その信頼性と妥当性を検証する.	日本看護科学会誌, 41, 344-353.	量的
4	看護大学生の実習指導者に対する援助要請の促進要因	五十嵐貴大, 佐藤みつ子 (2019)	看護学実習における学生の実習指導者に対する援助要請の促進要因について明らかにする.	看護教育研究会雑誌, 11 (2), 15-24.	質的
5	看護学実習における相談行動や就職直後の自己効力感に関連する因子の検討	片山忍, 小澤三枝子 (2018)	実習中の看護師への相談行動, および就職直後の自己効力感に関連する因子を検討し, 看護基礎教育への示唆を得る.	国立看護大学学校研究紀要, 17 (1), 19-28.	量的
6	看護系大学低学年における学業的援助要請と内発的動機づけならびに学習方略の関連	熊谷たまき, 小竹久実子, 上野恭子, 藤村一美 (2017)	看護大学低学年における学業的援助要請と学習の内発的動機づけ, さらに自己効力感の関連を検討すること, また学習方略の内発的動機づけを介する学業的援助要請への影響を検討する.	大阪市立大学看護学雑誌, 13, 29-36.	量的

2. 学生が行っている援助要請の実際 (表 2)

対象とした文献から, 学生が行っている援助要請の実際の記述として, 79 のコードを抽出し, それらを類似性に基づいて分類した. 分析の結果, 17 サブカテゴリ, 6 カテゴリ, 2 コアカテゴリに分類された. 以下, コードを< >, サブカテゴリを「 」, カテゴリを『 』, コアカテゴリ【 】と記載する. なお, 表 2 における右端の数字は文献 No である.

1) 【学生の援助要請の内容】

本カテゴリは 4 カテゴリ, 文献 No 1, 2, 5, 6 から構成されていた.

『自律的援助要請との関連』では, <自律的援助要請をとるほど自己効力感が高い>, <内発的動機づけが高いほど自律的に援助をとる傾向が高い>, <認知的方略と自己調整を行っている者ほど自律的援助要請が高い>ことから, 自律的援助要請の学生は, 自己効力感, 内発的動機づけ, 学習方略の活用において高いことが報告されていた.

一方で『援助要請過剰型および依存的援助要請との関連』では, 「自己効力感が低い」, 「内発的動機づけが低い」, 「自己調整の活用が低い」, 「看護師に相談する傾向がある」ことから<援助要請自立型の者と比べると, 援助要請過剰型の者は看護師に相談する傾向にある>が報告されていた.

『援助要請回避型および要請回避との関連』では, 「自己効力感が低い」から<援助要請を回避するほど

自己効力感が低下する>, 「内発的動機づけが低い」から<要請回避の内発的動機づけは, 依存的援助要請よりも低い>, 「認知的方略の活用が低い」から<リハール・精緻化・体制化等の認知的方略の活用が低いものほど要請回避が高い>が報告された. また援助要請回避型および要請回避の学生は「看護師に相談しない, あるいは相談できない」ことから<援助要請回避型の者は, 援助要請自立型の者と比べると患者ケアでの相談行動が少ない傾向にある>が報告されていた.

『援助要請スキルとの関連』では, 「援助スキルが高い」学生ほどソーシャルサポートが高いが, 「援助要請スキルが低い」学生は精神的健康が低く, 不健康であると報告されていた.

2) 【学生の援助要請行動の促進・抑制】

本コアカテゴリは, 2 カテゴリ, 文献 No 1, 4, 5 から構成されていた.

『行動が促進される』では, 「学生自身が自律性・目的志向をもって実習に臨んでいる」ことから<積み重ねてきた学習で自信と知識があり, 質問されても答えられる自信がある>が挙げられていた. また, 「患者の安全が脅かされると判断する」ことから<患者の不利, 状態の悪化など, 患者に影響すると感じる時>が報告されていた. 「実習指導者が学生を尊重し, 実習しやすいよう配慮している」では, <実習指導者から学生に接近し, 気にかけて声をかけてくれる, 学生を

表 2. 学生が行っている援助要請の実際

コア カテゴリ	カテゴリ	サブカテゴリ	コード	文献 No
学生の援助 要請の内容	自律的援助要 請との関連	自己効力感が高い	・自律的援助要請をとるほど自己効力感が高い。	6
		内発的動機づけが高い	・内発的動機づけが高いほど自律的に援助をとる傾向が高い。	6
		学習方略の活用が高い	・認知的方略と自己調整を行っている者ほど自律的援助要請が高い。	6
	援助要請過剰 型 ^{a)} および依 存的援助要請 ^{b)} との関連	自己効力感が低い	・依存的援助要請が高いほど自己効力感が低下する。	6
		内発的動機づけが低い	・内発的動機づけが低いほど、依存的援助要請をとる傾向がある。	6
		自己調整の活用が低い	・努力調整方略、メタ認知方略等の自己調整が低いほど依存的援助要請行動をとる。	6
		看護師に相談する傾向がある	・援助要請自立型の者と比べると、援助要請過剰型の者は看護師に相談する傾向にある。	5
	援助要請回避 型 ^{c)} および要 請回避 ^{d)} との 関連	自己効力感が低い	・援助要請を回避するほど自己効力感が低下する。	6
		内発的動機づけが低い	・要請回避の内発動機づけは、依存的援助要請よりも低い。	6
		認知的方略の活用が低い	・リハーサル・精緻化・体制化等の認知的方略の活用の低いものほど要請回避が高い。	6
	看護師に相談しない、あるいは相談できない	・援助要請回避型の者は、援助要請自立型の者と比べると患者ケアでの相談行動が少ない傾向にある。	5	
援助要請スキ ルとの関連	援助スキルが高い	・教員・実習指導者との関係では、「相談群」ほど援助スキルの得点が高い。	1	
		・看護実践において、「相談群」ほど援助要請スキルの《援助要請の方法》が高い。	1	
		・教員・実習指導者において「相談群」ほど、援助要請スキルの《援助要請の方法》《相手に伝える内容》が高い。	1	
	援助スキルが低い	・援助要請スキルが高いほど、ソーシャルサポートが高い。 ・援助要請スキルが低いほど、精神的健康が低い。	2 2	
学生の援助 要請行動の 促進・抑制	行動が促進さ れる	学生自身が自律性・目的志向をもって実習に臨んでいる	・積み重ねてきた学習で自信と知識があり、質問されても答えられる自信がある。 ・答えを教えるのではなく、答えに導く助言や問いかけなどから、考えを引き出してくれる。 ・わからないことを聞く機会を逃さないなど、自分から行動しないと変わらないと思うとき。	4 4 4
		患者の安全が脅かされると判断する	・患者の不利益、状態の悪化など、患者に影響すると感じるとき。	4
		実習指導者が学生を尊重し、実習しやすいよう配慮している	・実習指導者から学生に接近し、気かけ声をかけてくれる、学生を受け入れてくれる。 ・実習指導者から尊重されている。 ・実習での肯定的体験が多い。	4 4 5
			・相談する看護師が明確である。 ・実習環境は看護実践しやすい雰囲気を感じるとき。	5 4
		行動が抑制さ れる	相談しにくい	・教員・実習指導者との関係に関する困りごとは相談しにくい。

a) b) 「援助要請過剰型」、「依存的援助要請」は同義語のため、同じカテゴリ、サブカテゴリ内に整理した。

c) d) 「援助要請回避型」、「要請回避」は同義語のため、同じカテゴリ、サブカテゴリ内に整理した。

受け入れてくれる>、<実習指導者から尊重されている>など、実習指導者の学生に対する態度が挙げられていた。

一方、『行動が抑制される』では「相談しにくい」から<教員・実習指導者との関係に関する困りごとは相談しにくい>が挙げられていた。

3. 既存の援助要請尺度と関連項目の結果 (表 3)

対象論文 6 件のうち、既存の援助要請尺度を用いて

分析している論文は 5 件であった。野崎 (2003) の学業的援助要請尺度が 1 件、本田他 (2010) の援助要請スキル尺度が 2 件、永井 (2013) の援助要請スタイル尺度が 2 件であった。

1) 学業的援助要請尺度と関連項目の結果

学業的援助要請尺度を用いた熊谷他 (2017) の文献では、MSLQ (Motivated Self-Learning Questionnaire) 尺度 (以下、MSLQ) の下位概念である内発的価値、認知的方略、自己調整と特性的自己効力感尺度との関連

を調査していた。熊谷他 (2017) は、学業的援助要請尺度の適応的援助要請を同義語の自律的援助要請として扱い、調査上では自律的援助要請、依存的援助要請、要請回避に分類していた。学業的援助要請尺度の内発的動機づけが高いほど自律的に援助 (0.370, $p<.001$) を求める一方で、低い内発的動機づけは依存的な援助要請 (-0.226 , $p<.01$) および援助要請を回避 (-0.416 , $p<.001$) すること、自律的援助要請は自己効力感を高める一方で、要請回避および依存的要請は自己効力感を低下させていた。自律的援助要請は学習方略の自己調整と認知的方略の媒介効果がみられた。自律的援助要請は、内発的動機づけ、自己効力感、学習方略と関連があることを報告していた。

2) 援助要請スキル尺度の関連項目の結果

援助要請スキル尺度を用いた文献は近藤他 (2023) と後藤他 (2021) の2件で、開示状況質問紙、日本語版 Rathus assertiveness schedule (以下、日本語版 RAS)、他者支援尺度、精神健康調査票 (以下、日本語版 GHQ28)、新大学生ソーシャルスキルサポート尺度、研究者が作成した質問紙 (近藤他, 2023) を用い関連を調査していた。援助要請スキル尺度の下位尺度は、適切な援助者の選択、援助要請方法、相手に伝える内容の3つが設定されている。近藤他 (2023) は、看護系大学2~4年生を対象に、実習における困りごとの相談の有無について、看護実践、患者との関係、教員・実習指導者との関係の3つの状況を尋ねた。困ることがあった者のうち、相談した者を相談群とし、相談しなかった者を非相談群に分け比較した結果、看護実践では、援助要請スキルの下位尺度「援助要請の方法」($p<.01$)、教員・指導者との関係では「援助要請の方法」「相手に伝える内容」($p<.05$)において、共に相談群が有意に高かったことを報告していた。一方、後藤他 (2021) は、3年課程の学生に調査し、援助要請スキル尺度の下位尺度「適切な援助者の選択」において、1年生より3年生が有意に低かった ($p=0.046$) こと、援助要請スキルはソーシャルサポートの間に高い正の相関 ($r=.752$, $p=.000$) があつたこと、日本語版 GHQ28 との間は中程度の負の相関 ($r=-.423$, $p<.01$) があつたことから、援助要請スキルとソーシャルサポートは関連があることを報告していた。

3) 援助要請スタイル尺度と関連項目の結果

援助要請スタイル尺度を用いた論文は五十嵐他 (2021) と片山他 (2018) の2件であつた。援助要請

スタイル尺度の下位尺度は、援助要請自立型、援助要請過剰型、援助要請回避型に分類されている。五十嵐他 (2021) は、学生の臨地実習指導者に対する援助要請に関する尺度開発において、援助要請スタイル尺度を基準関連妥当性との検討に用いていた。作成した尺度全体と援助要請スタイル尺度との間に弱い相関がみられた。一方、片山他 (2018) は、研究者間で作成した質問紙を用い、援助要請スタイル尺度を用いて調査し、援助要請過剰型と援助要請回避型について報告していた。新卒看護師を対象に、看護基礎教育で受けた実習中の看護師への「患者ケア」の相談行動に関連する因子には、相談する看護師が明確である ($p<.001$) こと、実習での肯定的体験がある ($p<.001$) こと、援助要請過剰型である ($p=.010$) こと、援助要請回避型でない ($p=.013$) ことであつたと報告していた。また、援助要請自立型の者と比べると、援助要請過剰型の者は看護師に相談する傾向にあり、援助要請回避型の者は看護師に相談しない傾向にあつたと述べていた。

4. 開発された学生の援助要請の尺度とその尺度開発の資料となつた研究 (表4)

五十嵐他 (2021) は、2因子「非要請コストの自覚」と「被援助利益の自覚」8項目からなる「看護大学生の臨地実習指導者に対する援助要請の意思決定尺度」を開発した。尺度開発にあつた質問項目作成には、研究者が行つた調査「看護大学生の実習指導者に対する援助要請の促進要因」(五十嵐他, 2019) の質的帰納的研究を基盤としていた。促進要因の7要因は、学生自身に関連する事として、【知識と体験から自信があるとき】【自分から行動しないと変わらないと思うとき】【患者に影響すると感じるとき】、実習指導者に関連する事として【実習指導者から接近してくれる】【実習指導者は問題解決能力がある】【実習指導者から尊重されている】、実習環境に関連する事として【実習環境が良い】であつた。尺度開発では、大学3, 4年次生を対象に無記名自記式質問紙調査を行い、項目分析と因子分析、モデルの適合度を確認している。基準関連妥当性に援助要請スタイル尺度を用いており、五十嵐他 (2021) が作成した尺度全体と援助スタイル尺度 (永井, 2013) との相関は、援助要請自立型 ($r=.311$)、援助要請過剰型 ($r=.151$)、援助要請回避型 ($r=-.257$) であつた。

表 4. 開発された学生の援助要請の尺度とその尺度開発の資料となった研究

文献 No	著者 (年数)	開発された 尺度	因子と 項目数	累積説明 率 (%)	項目内容を決定 するための資料	対象者と 人数 ^{a)}	信頼性		妥当性	
							α 係数	再検査法	基準関連妥当性 ^{b) c)}	
3	五十嵐他 (2021)	看護大学生の臨地実習指導者に対する援助要請の意思決定尺度	2 因子 8 項目 ^{d)}	-	・研究者が行った看護学生の 実習指導者に対する援助要請 の促進要因の調査結果から、 援助要請尺度 (案) 40 質問 項目を抽出し基盤とした。	第 1 調査 808 名 第 2 調査 116 名	.836	.860 ^{e)}	援助要請自立型 (r=.311)** 援助要請過剰型 (r=.151)** 援助要請回避型 (r=-.257)**	

文献 No	著者 (年数)	尺度の資料となった研究	研究対象者 ^{f)}	方法論・データ 収集・分析	結果
4	五十嵐他 (2019)	看護大学生の実習指導者に対する援助要請の促進要因	看護系大学生 4 年生 18 名	質的記述の方法 半構造化面接 質的帰納的分析	・実習指導者に対する援助要請の促進要因には、①学生自身に関連する事として【知識と体験から自信があるとき】【自分から行動しないと変わらないと思うとき】【患者に影響すると感じる時】、②実習指導者に関連する事として【実習指導者から接近してきてくれる】【実習指導者は問題解決能力がある】【実習指導者から尊重されている】、③実習環境に関連する事として【実習環境が良い】の 7 つの要因があった。

- a) 人数は調査時の有効回答数である。外国籍、留年経験者、浪人経験者、社会人経験者は除外している。
- b) Person の積率相関係数 ** p < .01
- c) 基準関連妥当性に用いた尺度は、永井 (2013) の援助要請スタイル尺度である。
- d) 40 質問項目のうち天井効果を示した 28 質問項目を削除、探索的因子分析により 2 質問項目を削除、内的整合性の確認により 2 項目を削除し、最終的に 2 因子 8 質問項目の「非要請コストの自覚」と「被援助利益の自覚」を抽出した。
- e) 1 回目と 2 回目の援助要請尺度の級内相関係数である。
- f) 留学生および社会経験者は除外し、現役のみとしている。

V. 考察

1. 学生の学業的援助要請における研究の動向

本研究では対象となった文献が 6 件と少なく、看護学生の援助要請に着目した研究は乏しい現状であった。理由の 1 つとして、援助要請という用語が、現時点で多数な用語で用いられ共有しにくいことから、看護学領域においても十分に浸透していないことが考えられた。本研究で対象となった質的研究は、学生の援助要請における促進要因を丁寧に分析した五十嵐他 (2019) の論文 1 件のみと少なかった。この五十嵐他 (2019) の質的研究を含め、実習に関する援助要請に関する論文が 4 件と実習に関心が向けられていた。看護学実習は、看護学教育最大の特徴的な授業であり、学生の基礎的な看護実践能力修得に不可欠な授業である (舟島他, 2013) という特徴から、看護学実習は学生にとって達成感を感じることも多い (井城他, 2016) 反面、ストレスを感じている学生もいる (加島他, 2005) ことが報告されている。そのため、実習指導に関わる教員や指導者は、学生が実習に関心を持ち課題解決に向き合えるよう教育的支援をする必要性があることから、実習における学生の援助要請の関心が高いことが考えられた。

2. 看護学生が行っている援助要請の実際

1) 学生の援助要請の内容

本研究の結果から、『自律的援助要請との関連』に

において、＜自律的援助要請をとるものほど自己効力感が高い＞、＜内発的動機づけが高いものほど自律的に援助をとる傾向が高い＞、＜認知的方略と自己調整を行っているものほど自律的援助要請が高い＞ことが報告された。先行研究によると、適応的援助要請は、自己調整学習における方略の 1 つであり、適応的援助要請の過程には、自己内省や自己情動・動機づけの要因がある (Schunk & Zimmerman, 2008/2009) ことや、自律的援助要請の同義語である援助要請自立型について、援助要請スタイルの 3 組の中で最もバランスが取れている (永井, 2019) と述べている。このことから、本研究対象論文においても、自律的援助要請を用いている学生は、学業において望ましい援助要請を行っているかと推測される。

一方で、『援助要請過剰型および依存的援助要請との関連』では、＜援助要請自立型の者と比べると、援助要請過剰型の者は看護師に相談する傾向にある＞が特徴として挙がっていた。永井 (2020) は過剰な援助要請の背景には、豊富なサポートを有していること、一方で、悩みに対して適切な距離をとることが出来ないことや、拒否されることへの不安や他者の意見から影響を受けやすく、対人関係にとらわれるような傾向が存在していると述べている。これらから、援助要請過剰型および依存的援助要請の学生は、看護師と適切な距離をとることができず、看護師に過度な援助要請をするものと考えられる。

『援助要請回避型および要請回避との関連』では「看護師に相談しない、あるいは相談できない」ことが特徴として挙がっていた。援助要請型および要請回避型の学生は、援助要請を回避するため、課題を抱えていても自ら教員や指導者に援助要請を行わず、課題を解決しない状態で放置している可能性から、看護に関する学習への興味関心が低下し「内発的動機づけが低い」と推測される。このような状況にある学生は、実習において学習が追いつかず、知識が曖昧のまま未熟な看護を患者に提供するなど、患者の安全を守るうえで問題になってくる可能性が推測される。

『援助要請スキルとの関連』では、「援助スキルが高い」学生は、ソーシャルサポートが高いという結果であった。これより、望ましい援助要請をとっているのは、自律的援助要請とソーシャルスキルが高い学生であると考えられる。本研究結果から、援助要請スキルとソーシャルサポート、精神的健康との関連がみられた。身体的および心理的健康が良好な学生は、より良い学習と学業成績のために学業上の助けを求めている(Umarani, 2020)ことから、他者からサポートを引き出すためには、困りごとを伝える援助要請スキルが必要といえる。援助要請スキル尺度は中学生を対象に開発されたものであるが、これらから援助要請スキルを獲得することは、学生が学業的援助要請を行う上で有用であることが示された。

2) 学生の援助要請行動の促進・抑制

本研究では、『行動が促進される』内容が多く抽出された。「学生自身が自律性・目的志向をもって実習に臨んでいる」では、<積み重ねてきた学習で自信と知識があり、質問されたとしても答えられる自信がある>ことから、学生自身が定めた目標に向かって、学習を計画しながら学習を進めていく力があり、そこから生じる自信が学習を支え、それが学習への意欲となり、援助要請行動が促進されることにつながっていったと考える。また、学生が患者の不利益、状態悪化などを判断するには、患者の状態の変化を分析する知識が必要である。学生は学習の積み重ねや日々の観察により患者の変化を気づく目が培われていくと考える。そのため学生が「患者の安全が脅かされると判断する」とき、学生自ら看護師に報告する行動をとることによって患者の安全が確保されると考えたことから、援助要請行動が促進されたと推測する。「実習指導者が学生を尊重し、実習しやすいよう配慮している」では、<実習指導者から学生に接近し、気かけ声をか

けてくれる、学生を受け入れてくれる>などから、指導者は、学習できるよう配慮していることが窺える。一方『行動が抑制される』では、「相談しにくい」があり<教員・実習指導者との関係に関する困りごとは相談しにくい>が挙げられていた。吾妻他(2014)は、学生は、基礎看護学実習で言いたかったけれど言えなかった体験をしており、その対象者はスタッフ看護師、教員、臨床指導者、患者の順に多く、忙しそうな相手の状況に配慮したり、成績評価を気にして言えなかったことを報告している。このことから、学生は指導を受けている身であり、実習の評価にも関係するのではないかという懸念が生じ、学生にとって教員や実習指導者に関する事柄は、援助要請しにくいのではないかと推測される。

3. 本研究の対象論文で用いられていた援助要請尺度について

本研究の対象であった5件の量的研究は、心理学領域で開発された既存の援助要請尺度を用いて分析していた。用いられていた援助要請尺度は、「学業的援助尺度」、「援助要請スキル尺度」、「援助要請スタイル尺度」の3つの尺度であり、そのうち2つの尺度は中学生を対象に開発されたものであった。本研究の対象論文で α 係数を算出して確認していた論文は、熊谷他(2017)の1件であった。本研究の対象論文のように、対象を看護学生として既存の援助要請尺度を用いた場合、因子に含まれる項目や因子構造が異なる可能性もあるため、因子分析を行って内的整合性を確認する必要があると考える。

本研究の対象論文が、さまざまな既存の援助尺度を用いて分析していた理由として、学生の学業上の援助要請に着目した研究が少なく、また、それらを評価する標準的な尺度が開発されていないことが挙げられる。本研究の対象論文のなかに、学生の援助要請尺度開発を試みた五十嵐他(2021)の報告があった。五十嵐他(2021)の研究は、永井(2013)の援助要請スタイル尺度を用いて基準関連妥当性を検証していたが、結果は低い相関関係であった。五十嵐他(2021)が尺度開発に用いた先行研究(五十嵐他, 2019)は、援助要請の促進要因の調査であり、内容は学生が経験した場面を分析したものであった。一方で、基準関連妥当性で用いた援助要請スタイルは、悩みを経験した時の援助要請実行意図の有無、そして意図がある場合は事前に十分な自助努力をする意図が有るのか否かとい

う、対処意図のパターンに基づいて分類したもの（永井, 2019）であった。このことから、五十嵐他（2021）が作成した尺度は、肯定的な面が強調され、ネガティブな援助要請を表現しにくかったことが影響したのではないかと推測する。尺度で最も重要な構成概念妥当性には、理論的根拠と実証的根拠が求められる（Polit & Beck, 2004/2010）ことから、開発した尺度の信頼性と妥当性の検証を積み重ね、尺度の精度を高めていく必要がある。加えて、学生の学習を促進および支援するためにも、学生を対象とした援助要請を適切に評価できる尺度開発が望まれる。

本研究の結果より、学生の援助要請を促進する要因には、自己効力感、内的動機づけ、学習方略、ソーシャルサポートが挙げられた。伊山他（2018）は、『動機づけ』と『学習方略』で構成する看護学生の臨床実習における自己調整学習は、『自己効力感』と関連し、『動機づけ』『学習方略』『自己効力感』の間でも関連していたと述べている。これより、自己効力感、内的動機づけ、学習方略は、学生の援助要請を促進する主要な関連要因といえる。ただし、対象論文は横断研究のため因果関係は断定できない。今後は縦断研究から因果関係についても検討する必要がある。

4. 学生の援助要請を促進するための教育的支援への示唆

援助要請は、学生個々によりの傾向や行動は異なることから、用いる援助要請の類型によって学業へ及ぼす影響が大きいことが推察される。田島（2020）は、多くの学生が「自立型」の援助要請スタイルを獲得し、実際に遂行していることが推測されると述べている。本研究の対象論文である片山他（2018）の報告によると、援助要請自立型が5割を超えていたことから、多くの学生は自律的に学習しているものと推測される。

一方で、援助要請過剰型および依存的援助要請は、問題が深刻でなく、本来なら自分自身で取り組むことが可能でも、安易に援助を要請する傾向である特徴をもつ（永井, 2020）といわれている。援助要請過剰型および依存的援助要請の＜援助要請自立型の者と比べると、援助要請過剰型の者は看護師に相談する傾向にある＞特徴から、質問した学生の意図を考慮した上で質問にそった発問をし、学生の思考を促す支援が望まれる。また、教員と指導者は、必要な情報を共有し合い、学生の援助要請の傾向から指導や支援の在り方を

考える必要があると考える。加えて学生が抱く不安や疑問について、躊躇せず相談できる支援体制を整える必要がある。他方、援助要請回避型および要請回避は、拒絶の恐れなどはないものの、良好な関係を有している訳ではなく、概して他者との距離が疎遠である可能性があること、悩みにうまく対応ができず、援助要請を行わない可能性がある（永井, 2019）。つまり、援助要請回避型および要請回避の学生は、自ら援助要請を行わないことから、教員および指導者が関心を抱かなければ、学生が学業に課題を抱えていること事態が顕在化しにくい面があると推測される。そのため、援助要請回避型および要請回避の学生に対し、教員および指導者は日ごろから関心をもち、学生が孤立することなく学習に関与できるよう配慮し、包容力のある態度で支援することが求められる。

本研究の結果から、自律的援助要請の学生が「自己効力感が高い」「内的動機づけが高い」「学習方略の活用が高い」「援助要請スキルが高い」から、学生の援助要請を促進する要因には、自己効力感、内的動機づけ、学習方略、ソーシャルサポートが挙げられた。その一方で、援助要請過剰型および依存的援助要請の学生では＜依存的援助要請が高いほど自己効力感が低下する＞、援助要請回避型および要請回避の学生では＜援助要請を回避するほど自己効力感が低下する＞など、自己効力感の低下が報告されていた。海沼他（2021）は、自己効力感と動機づけ調整方略を検討し、学習者にとって取り組みが容易な部分から学習を進める方略によって、少しずつ学習を進めることが自己効力感の向上につながることを報告している。これより、教員および指導者が自己効力感と動機づけが低下している学生への関わり方として、学生のレディネスを把握し、そのうえで学生が“これならできる”と思う学習内容から学習を進めていくことで、学業課題に取り組む手立てとなる可能性がある。加えて、学生の援助要請を促進させるためには、学習の到達目標の理解から、学生の取り組むべき学習課題の学習プロセスを大切にし、学生が根気よく時間をかけて学習課題に向き合うことを基盤とした教育的支援を行っていくことが求められるといえる。

本研究の結果から、ソーシャルサポートとの関係において＜援助要請スキルが高いほど、ソーシャルサポートが高い＞、その一方で＜援助要請回避型の者は、援助要請自立型の者と比べると患者ケアでの相談行動が少ない傾向にある＞ことから、他者との関係が

うまく構築できない学生が存在することが報告された。学生は、教師の情緒的サポートが看護への興味関心と関連性があった（菊池，2004）こと、援助要請回避型はソーシャルサポートが低い（永井，2019）ことから、教員および指導者は、学生との関係性を構築しながら、共感的・受容的に接していくことが求められると考える。しかしながら、学生が実際に援助要請を行うときは、望ましい援助を引き出せるような行動を自ら実行する必要がある。そのため、援助要請をうまく行えない学生に対し、必要な援助資源に援助を求める能力を高められる訓練や演習を行っていく必要がある。

学生の肯定的な体験は、援助要請において重要な意味をもつ。本研究において、援助要請『行動が促進される』には＜実習での肯定的体験が多い＞ことが挙げられていた。玉井他（2016）は、学生自身が納得し、体験を学びの成果として記憶できるような内省を学生の中に残すことが、肯定的な体験につながると述べている。また、本研究の結果から、＜実習環境は看護実践しやすい雰囲気を感じるとき＞や＜相談する看護師が明確である＞など実習環境がよいことが、援助要請が促進される要因に挙がっていた。実習における学生の良質な学びを支援するためには、実習指導者と看護教員双方の「指導能力の向上」と「連携の強化」を推進する取り組みが必要である（玉井他，2016）。このことから、学生を中心に教員と指導者が連携して実習を円滑に進めていけるように、学生の思いを汲み取りながら、援助要請しやすい環境体制を整えていくことが必要といえる。

学生の効果的な学習を促進するために、看護教育者である教員および実習指導者は、学習者のニーズ、求められる学習成果、学習内容、状況に適した多様な教授方略を実施する（Billings & Halstead, 2019/2021）ことが求められる。相互学習活動であるピア・ラーニングや、積極的かつ内省的な学習を促す協同学習など、学習同士が学習することができるような教授方略の工夫を行うことも必要と考える。しかしながら、本研究の結果より「自己調整の活用が低い」「認知的方略の活用が低い」など学習にリスクのある学生が存在することが報告された。リスクのある学生に対しては、コーチング/メンタリング活動を用いることの効果（Freeman et al., 2017）が報告されている。しかしその一方で、本谷他（2023）は、教授方略の一つであるアクティブラーニングは、教師による一方的な講

義形式とは異なり、学生の能動的な学修への参加を可能にするが、必ずしも高い学習成果につながるとはいえないと述べている。これより、学生の援助要請の類型によっては好まない教授方法がありうる可能性が考えられる。しかしながら、教員や指導者は、学習者である学生の援助要請の類型を手がかりに、さまざまな教授方法を学生が経験することを助けるために、教授される学習内容と期待される学習成果に重点を置いて支援を行っていく必要がある。加えて、教員や指導者の支援が学生に届くように関わっていくには、学生に寄り添い、理解しようとする姿勢や、学生が用いる援助要請の類型に対して柔軟に対応できる、教育実践力が求められるのではないかと考える。

VI. 研究の限界

本研究は、対象文献の数が少なく、文献の選択基準に合致する文献のみの結果である。そのため、学生の学業的援助要請についての知見を網羅的に把握できなかった可能性がある。

VII. 結論

国内の学生の援助要請に関する6文献を整理した結果、以下のことが明らかになった。

1. 学生が行っている援助要請の実際は、【学生の援助要請の内容】と【学生の援助要請行動の促進・抑制】に分類された。望ましい援助要請をとっているのは、自律的援助要請とソーシャルスキルが高い学生であった。また、学生の援助要請『行動が促進される』には、「学生が自律性・目的志向をもって実習に臨んでいる」、「患者の安全が脅かされると判断する」、「実習指導者が学生を尊重し、実習しやすいよう配慮している」が挙げられた。
2. 用いられていた既存の援助要請尺度と関連項目の分析から、学生の援助要請を促進する要因は、自己効力感、内的動機づけ、学習方略、ソーシャルサポートであった。
3. 学生の援助要請を促進していく教育支援として、援助要請過剰型および依存的援助要請の学生には、質問した学生の意図を考慮した上で、質問にそった発問し学生の思考を促していくこと、援助要請回避型および要請回避の学生には、日ごろから関心を持ち、学生が孤立することなく学習に関与できるよう配慮し、包容力のある態度で接することが求められる。そのうえで、学生の取り組むべき学習課題の学

習プロセスを大切にし、学生が根気よく時間をかけて学習課題に向き合うことを基盤とした支援の必要性が示唆された。

利益相反の開示

本研究における利益相反は存在しない。

著者の貢献度

ON は研究の着想およびデザイン、データ収集と分析、論文作成までの研究全体のプロセスに貢献した。OK はデータ分析と解釈を行った。すべての著者は、最終原稿を読み、承認した。

文献

- 吾妻知美, 鈴木英子, 齋藤深雪 (2014) : 看護学生のアサーティブネスの実態 : 基礎看護学実習でアサーティブになれなかった状況と実習後のアサーティブネス得点からの考察, 日本福祉学会誌, 21 (1), 13-23. doi : https://doi.org/10.20681/hwelfare.21.1_13
- Billings, D. M., Halstead, J. A. (2019/ 佐々木幾美, 奥村曉子, 小林美子, 2021) : 看護を教授すること大学教員のためのガイド, 第6版, 医歯薬出版株式会社, 東京.
- DePaulo, B. M. (1983) : Perspective on help seeking, *New Directions in Helping (Volume 2)*, 3-12, Academic Press, New York.
- Freeman J. C., All A. (2017) : Academic support programs utilized for nursing students at risk of academic failure: A review of the literature. *Nursing Education Perspectives*, 38 (2), 69-74.
- 舟島なをみ, 岩波浩美, 亀岡智美他 (2013) : 看護学教育における授業展開 質の高い講義・演習・実習の実現に向けて, 医学書院, 東京.
- 後藤華奈子, 山下久美子, 吉田美栄 (2021) : 看護学生の援助要請スキルとソーシャルサポート, 精神的健康の関連, 中国四国地区国立病院附属看護学校紀要, 16, 16-28.
- 本田真大, 新井邦二郎, 石隈利紀 (2010) : 援助要請スキル尺度の作成, 学校心理学研究, 10, 33-40.
- 五十嵐貴大, 佐藤みつ子 (2019) : 看護大学生の実習指導者に対する援助要請の促進要因, 看護教育研究学会誌, 11 (2), 15-24.
- 五十嵐貴大, 荒木田美香子, 佐藤みつ子 (2021) : 看護大学生の臨地実習指導者に対する援助要請の意思決定尺度の開発, 日本看護科学会誌, 41, 344-353. doi : <https://doi.org/10.5630/jans.41.344>
- 井城瑠衣, 曾我菜々美, 田中玲奈他 (2016) : 臨地実習における看護学生の経験と達成感との関連, 富山大学看護学会誌, 15 (2), 145-154. doi : <https://doi.org/10.15099/00018429>
- 伊山聡子, 前田ひとみ (2018) : 看護学臨地実習における看護学生の自己調整学習に関する研究, 日本看護研究学会雑誌, 41 (5), 833-840. doi : <https://doi.org/10.15065/jjsnr.20180403017>
- 海沼亮, 湯立, 外山美樹 (2021) : 大学生における自己効力感と動機づけ調整方略との短期縦断的検討, CRET 年報, 6, 69-71.
- 加島亜由美, 樋口マキエ (2005) : 臨地実習における看護学生のストレスとその対処法, 九州看護副大学紀要, 7 (1), 5-13. doi : <https://kyoukan.repo.nii.ac.jp/records/129>
- 片山忍, 小澤三枝子 (2018) : 看護学実習における相談行動や就職直後の自己効力感に関連する因子の検討, 国立看護大学校研究紀要, 17 (1), 19-28. doi : <https://doi.org/10.2974/kmj.73.61>
- 河部房子 (2015) : 自己の看護体験を評価する学習過程における看護学生の自己教育の様相, 日本看護学教育学会誌, 25 (1), 1-14. doi : https://doi.org/10.51035/jane.25.1_1
- 菊池昭江 (2004) : 看護学部3年生の学習意欲とソーシャルサポートの特徴—1年次と3年次の縦断的調査より—, 日本看護学教育学会誌, 13 (3), 29-38. doi : https://doi.org/10.51035/jane.13.3_29
- 近藤浩子, 柿畑雅之, 中村美香他 (2023) : 臨地実習における看護学生の援助要請行動に関する研究, 北関東医学, 73, 61-68. doi : <https://doi.org/10.2974/kmj.73.61>
- 厚生労働省 (2008) : 看護基礎教育のあり方に関する懇談会 論点整理, <http://www.mhlw.go.jp/shingi/2008/07/s0731-8.html> [検索日 2023年3月18日]
- 熊谷たまき, 小竹久実子, 上野恭子他 (2017) : 看護系大学低学年における学業的援助要請と内発的動機づけならびに学習方略の関連, 大阪市立大学看護学雑誌, 13, 29-36. doi : <https://doi.org/10.24544/ocu.20180403-018>
- 文部科学省 (2017) : 看護学教育モデル・コアカリキュラム 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/

- chousa/koutou/078/index.htm [検索日 2023年3月18日]
- 本谷久美子, 荒木田美香子 (2023) : 看護学教師の病態教授活動に関する海外文献レビュー, 日本看護研究学会雑誌, 46 (1), 63-72. doi : <https://doi.org/10.15065/jjsnr.2022101319>
- 永井智 (2010) : 大学生における援助要請意図—主要な要因間の関連から見た援助要請意図の規定因—, 教育心理学研究, 58 (1), 46-56. doi : <https://doi.org/10.5926/jjep.58.46>
- 永井智 (2013) : 援助要請スタイル尺度の作成—縦断調査による実際の援助要請行動との関連から—, 教育心理学研究, 61 (1), 44-55. doi : <https://doi.org/10.5926/jjep.61.44>
- 永井智, 鈴木真吾 (2018) : 大学生の援助要請意図に対する利益とコストの予期の影響, 教育心理学研究, 66, 150-161. doi : <https://doi.org/10.5926/jjep.66.150>
- 永井智 (2019) : 援助要請スタイル間の差異に関する探索的検討—援助要請過剰型・回避型の特徴—, 教育心理学研究, 67, 278-288. doi : <https://doi.org/10.5926/jjep.67.278>
- 永井智 (2020) : 臨床心理学領域の援助要請研究における現状と課題—援助要請研究における3つの問いを中心に—, 心理学評論, 65 (4), 477-496. doi : https://doi.org/10.24602/sjpr.63.4_477
- 中谷素之, 岡田涼 (2020) : 学業的・社会的領域の目標と学業的援助要請に関する包括的レビュー: 援助を求めることは常に最善か?, 心理学評論, 63 (4), 457-476. doi : https://doi.org/10.24602/sjpr.63.4_457
- 野崎秀正 (2003) : 生徒の達成目標志向性とコンピテンスの認知が学業的援助要請に及ぼす影響—抑制態度を媒介としたプロセスの検証—, 教育心理学研究, 51, 141-153. doi : https://doi.org/10.5926/jjep1953.51.2_141
- 大木秀一 (2013) : 文献レビューのきほん, 医歯薬出版, 東京.
- Polit D. F., Beck C. T. (2004/近藤潤子, 2010) : 看護研究原理と方法, 第2版, 医学書院, 東京.
- Schunk, D. H., Zimmerman, B. J. 編 (2008/塚野州一, 2009) : 自己調整学習と動機づけ, 北大路書房, 京都.
- 杉森みど里, 舟島なをみ (2021) : 看護教育学, 第7版, 医学書院, 東京.
- 田島真沙美 (2020) : 女子体育大学生の援助スタイルに関する研究: 援助要請スキル・被援助志向性・自尊感情の観点から, 東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要, 55, 1-11.
- 玉井寿枝, 関谷由香里 (2016) : 看護学実習における実習指導の成功事例からみた効果的かつ具体的な実習指導方法—経験型実習の授業展開の流れに基づいた分析—, 日本看護学教育学会誌, 26 (2), 15-28. doi : https://doi.org/10.51035/jane.26.2_15
- Umarani, J. (2020) : Do the Students have attitude to seek academic help? – A study among undergraduate students. Bangladesh Journal of Medical Science, 19 (4), 717-721.
- 山田恵子, 小林紀明 (2018) : 看護系大学の学生が臨地実習を通して「個人の特性」のコンピテンシーを形成していくプロセス, 日本看護研究学会雑誌, 41 (5), 841-851. doi : <https://doi.org/10.15065/jjsnr.20180408013>
- 山下暢子, 舟島なをみ, 中山登志子 (2018) : 看護学実習中の学生が直面する問題—学生の能動的学習の支援に向けて—, 看護教育学研究, 27 (1), 51-65. doi : https://doi.org/10.19015/jasne.27.1_51

(受付年月日 : 2023年9月12日 受理年月日 : 2023年12月4日)

< Research Report >

A Literature Review on Facilitating Academic Help-Seeking in Nursing Students in Japan

Naoko Ozawa¹⁾, Keiko Oikawa²⁾

1) Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, University of Human Arts and Sciences

2) Department of Nursing, Faculty of Nursing, Tokiwa University

Keywords : Academic Help-Seeking, Facilitating Academic Help-Seeking, Nursing Students, Literature Review